



Title	佐藤春夫「その日暮らしをする人」論：「ネクタイ」と「旅行」を手がかりに
Author(s)	鄧, 矜
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2025, 58, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/100904">https://hdl.handle.net/11094/100904</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 佐藤春夫「その日暮らしをする人」論

—「ネクタイ」と「旅行」を手がかりに—

鄧 羚

キーワード…佐藤春夫／大正十年代／消費／欲望

## 一 はじめに

夫を持つ女性と交際して失恋した事件によって落ち込んでしまう職業作家である「私」が、無為の日々を過ごし、初夏の東京市街を旅行しながら、せつせとネクタイを買い集める。その筋をこう要約しうる「その日暮らしをする人」（『中央公論』大正一〇年一〇月）は、複雑な書誌を持ち、位置付けが不安定な作品である。他の五編の作品「続その日暮らしをする人」（『中央公論』大正一一年一月）、「空しく歎く」（『改造』大正一一年二月）、「後の日に或は『続々その日暮らしをする人』」（『中央公論』大正一一年四月）、「剪られた花」の一節（『新小説』大正一一年六月号）、「墓畔の家」（『新潮』大正一一年八月）と順番を入れ替え、各々の題目を削除した上で、「或はその日暮らしをする人」の副題を付し、単行本『剪られた花』（新潮社、大正一一年八月）に収録された。

本作は中村武羅夫に「心境小説の最も代表的作家」である春夫の「尤なるものである」<sup>(1)</sup>と評価されたが、広津和郎に同時期に発表された「秋刀魚の歌」(『人間』大正一〇年十一月)と到底比べ物にならない不評作だと酷評される。岡栄一郎は「どうも何処か物足りない気がしてならない」、「全身的に首肯するの躊躇する」<sup>(3)</sup>と論じ、赤松月船も『剪られた花』全体について「特に退屈することがある」、「発展といふものがなくて繰返しがあるばかりだからである」<sup>(4)</sup>と酷評した。また中村評の影響が色濃く、『剪られた花』の作品群は「一時期の心境記録」<sup>(3)</sup>と見做され、その頃の作者の心境を見つけることに重点を置く読み方が引き続がれている。そして作家情報が整備された現在、本作は「読めばすぐに春夫を思い浮かべる」<sup>(6)</sup>自伝的な作品に分類されることが更に常識化している。

作品の位置付けの不安定さと読み方の固定化の故に、本作を自立したテクストとして多角的に考察する研究は今まであまりなされていない。本稿は「その日暮らしをする人」を従来おかれていた心境小説の磁場から引き剥がし、歴史的な文脈に沿いつつ、ジェンダーまた消費の視座から主人公の「私」のネクタイの買い漁りと旅行について考察し、それらの行為に潜在する欲望の生成問題を明らかにする。

## 二 男性性を回復する道具としての「ネクタイ」

河野龍也は『剪られた花』のシリーズを「初めて〈私〉の「日常」そのものが作品の焦点になった」ため、「春夫の「私小説」としては画期的な意味を持つ」<sup>(7)</sup>と高く再評価すると同時に、「私」のネクタイに対する愛着は一種の代償行為であると指摘したが、「ネクタイ」という表象が生産された時代のコンテクストを踏まえるならば、その意味はより多義的である。またネクタイを買うことは、女を失った現実の苦しさを忘れるための行為であるなら、そこに

潜在する欲望は性愛との関連で生成しており、その考察にはジェンダー的観点も不可欠であるため、河野論を踏まえ、更に詳しく考察する必要がある。

シャツとネクタイを伴うジャケットとベストとズボンによって構成された近代のスーツ体系は明治時代の文明開化と共に近代日本へ舶来された。明治五年一月一二日の太政官第三三九号布告によって「礼服ニハ洋服ヲ採用ス」<sup>(8)</sup>るようになり、国家官僚の正式な服装が衣冠や狩衣など日本古来の装束から、西洋と同じようなスーツ礼服へと改められた。そして明治四〇年以降、『紳士の服装』（関根商会高等洋服店刊行、明治四四年九月）、『紳士と社交』（実業之日本社刊行、明治四一年一月）など、紳士になるための指導書の服装部分において燕尾服、フロックコート、モーニング、タキシードを代表とする洋服が取り上げられ、いずれの姿にもネクタイの色や生地について言及されている。<sup>(9)</sup>

このような雑誌は国家が認定した紳士像を作り出すことに効果的であると同時に、「その整然とした服装で、天皇の前に居並ぶ紳士たちが作り出す空間こそ、近代天皇制がもたらす時代成約性が可視化された姿であった<sup>(10)</sup>」と言える。大正天皇の即位御大典で燕尾服に白ネクタイ、フロックコートに黒ネクタイの規定に違反する者と和服で来場する者は門前払いされたように、国家が礼装規定また各階層のあるべき姿を作り出すことによって、エリート男性が代表とする洋服を着用する者と、洋服を着用できずに和服しか着用できない者との間に境界線を作り出していた。

以上の着装規範と同時代の身だしなみ言説から見ると、「私」が執着するネクタイは、男性に専属する小物であると同時に、洋服、特にフォーマルウェア体系において不可欠な構成要素であり、エリート男性の象徴でもあることが確認できる。そして作中の「私」は自分のネクタイを買い始める原因を次のように述べた。

——私はいつのところからか、これもやはりあの事件のなごりであらうが、ずるぶん小遣銭のかかる人間になつて

しまった。(中略) 私は別に酒を飲むわけではない。女を買ふわけではない。そんな買ひものとはどちらかと言ふと私にはいささか不向きである。(中略) 実は、私はネクタイを買ふのだ。ネクタイを。<sup>(11)</sup>

「あの事件」というのは「私」が夫を持つ女性と交際して失恋したことである。男にとって他の男——その男が彼女の法律上の夫である場合でも——に女を奪われてしまうほど、自分の男性性に動揺を感じることはない。それゆえ、「私」の失恋後のネクタイへの偏愛と饒舌で過敏な防禦の姿勢は、確かに河野が指摘した「彼女への愛の代償行為」<sup>(12)</sup>であるが、「私」が自分の危機に陥った男性性を保護・回復させる手段であるとも考えられる。

またここで更に見逃してはならないのは「私」の「ネクタイを買ふ」ことを「酒を飲む」と「女を買ふ」ことの対極に立つ行為として正当化する姿勢である。なぜなら失恋によって女性を支配する地位を失う「私」とって、「女を買ふ」ことはその支配を回復するためにもっと直接的な手段として考えられるが、「私」はその選択肢を自ら拒否したからである。自分の男性性を確認するには他者からの承認が必要であるが、女性を直接的な支配を避ける「私」にとって、回復しようとする男性性を確保できる他者には最初から女性が排除されており、専ら男性を指すものだと考えられる。

前述のネクタイの考察を踏まえて更に考えると、「私」が回復したいのは「飲む・買う・暴れる・喧嘩する・刺青を入れるなど」、「無秩序で刹那的な行為」<sup>(13)</sup>によって構築された下層社会労働者の男性性ではなく、同時代に支配的だった規範をめぐる言説システムによって構築された中産階級以上の男性性であると想定できる。

本作において、資本主義の労働力の生産効率向上に対する不適切な消費である飲酒と女遊びを避ける「私」は「毎月喘ぎ喘ぎ書」き、原稿を出版側へ「持込んで金にしたりした」<sup>(14)</sup>知識階級の職業作家であるが、今はなかなか書けな

い事態に直面した。日露戦争後、運輸力の発達や識字率の向上に伴い、近代活字メディアの基盤が形成され、作家がかつてない原稿料を手に入れることが可能となったが、その収入は出版側の裁量や作者自身の創作意欲に大きく依存した。そのため、失恋により創作意欲が低下する「私」は、収入の危機の中、近代国民国家の支配層の参入許可証として表象されるネクタイを選んだ。その行為には男性性の回復への欲望だけではなく、同時代の男性中心の出世競争の勝ち組、言わばネクタイをつける必要があり、安定した月給がもらえるサラリーマンを代表とする新中間層へ編入する欲望も存在する。つまり、自分の内面の「見すばらし」さと「身すばらし」さ、すなわち他人から見られる自分の外見と関連し、「精一ぱいに自分の身のまわりをきちんとした」<sup>(15)</sup>「私」は、ネクタイをつけることで自分をより心強く演じ、安定しているかのように見せることができる。そのため、ネクタイは自分の内面と真実を隠蔽する仮面のようなものでありつつ、理想的な「自己を想起させるために使われる表現形式」<sup>(16)</sup>でもあると言える。

さらに本文では「私」がネクタイを「武装」<sup>(17)</sup>として喩え、「現代の青年に何を要求せらるるか」という雑誌社からの原稿依頼に「装甲自動車のやうな意志と探海燈のやうな理智と、爆裂弾のやうな感情を持つたう高邁の精神を！」<sup>(18)</sup>と書いている。敗戦まで軍隊の構成員が男性に限定され、軍人は男らしさの概念の最たるものであると言うまでもないが、日露戦争後の「青年」も将来有用な国民となることが期待され、「世代観念と男性性をともしないながら構築され推奨された」<sup>(19)</sup>存在であり、いずれも女の存在のみならず、女性的なものさえも排除するカテゴリーである。軍隊や戦争を強く意識し、男同士の競合関係に敏感な「私」にとって、ネクタイは他の男と戦うための「武装」であり、敗北による男性性の危機から自分を守るための保護服でもあると考えられる。

要するに、他の男に女を奪われ、職業作家としての社会経済的地位に不安定さも抱えている「私」は、男性中心の競争に敗北し、重層的に自分の男性性の揺らぎを感じた。そのため、「私」が失恋後にネクタイを求め始めたことは、

失った女に対する愛の代償行為というより、むしろ彼女の夫を強く意識し、他の男に勝ることで自身の男性性を回復しようとする行為だと言ったほうが妥当である。

### 三 大正十年代における「私」の「旅行」

前節に「私」のネクタイを買い漁る行為を考察してきたが、「私」の近頃の日課は、実にネクタイをつけながら東京の街へ出かけるとのことだ。しかし、先行研究では「私」の移動に関する部分が見落とされてきた。

憂鬱がそのかがり目から忍び込みでもするやうでその日一日は折角の散歩——といふより旅行といふほうがいやうだが（中略）さうしてそれは私には決して用もないものである！私は何か自分に用があるもの、自分自身の武装に役立つものを見つけなければならぬ。（中略）ただ自分自身の気持を守るために、まるで武装をするやうなつもりで身なりをととのへた。それから懷には相応な金をなるべく欠かさないように用意して、事情のないかがり無論ひとりで、初夏の東京市街を旅行した。<sup>(20)</sup>

「私」は自分の東京市内の移動は「散歩」ではなく「旅行」だと二回も強調して述べた。なぜ、「私」は「旅行」だと強調するのか。ここに「私」にとって東京内の移動の意味という問題が浮上する。本作における「私」の旅行のルートをとまとめると、次のようになる。往きは青山四丁目から青山一丁目まで歩行、青山一丁目から信濃町まで東京電気鉄道外濠線、信濃町から神田駅まで省線電車中央線（神田駅から新橋駅まで省線山手線）、神田駅から銀座まで

歩行、帰りは銀座から新橋駅まで歩行、新橋駅から品川駅まで省線山手線、品川駅から青山墓地までタクシー、すなわち赤坂・青山、銀座、新橋、青山墓地を時計回りに一回りすることである。つまり「私」の旅行は銀座を目的地とした上で、東京の最も近代化され、西洋・外国に模倣・近似する空間を中心に展開したものだと確認できる。

吉見俊哉は近代的な煉瓦街建設がもたらした影響のひとつは「舶来品専門店の集中」であり、「震災の頃までの銀座は、大衆の欲望を満足させる盛り場というよりも、むしろ舶来品中心に特化した専門店街だった」と述べる。そして吉見が述べるもう一つの特徴は新聞・雑誌・出版社の集中であり、「これら銀座に本拠を置いた新聞社が、文明開化のシンボルとしての「銀座」のイメージを全国に普及させていく媒体の役割を担」い、銀座を「より抽象化された「西洋」、すなわち〈外国Ⅱ未来〉に結びつく空間<sup>(21)</sup>」として表象した点である。更にこのような実際に到達不可能な西洋のかわりに外からの視線を提供する銀座という空間は「都市全域から見るとまだ「島」のようなものにすぎない<sup>(22)</sup>」と結論をつけた。

換言すれば、銀座とは当時上流社会の消費の場所であるだけでなく、まだ近代化されていない東京の他の地域を凌駕する西洋の分身のような存在である。したがって、「私」の銀座への空間的な移動は、実際の物理的な距離としてはさほど遠くない移動だが、日本から模擬西洋、つまり前近代から近代化された明治、更に消費社会的な大正の現代への、時間的・心理的な移動だと言える。だからこそ、「私」にとってこの近代・西洋として表象される銀座への移動は、確かに単なる日常的な散歩ではなく、特別な準備を要する旅行だったのである。

経済の発展と鉄道事業の成長に伴い、大正十年代に近代初期の旅行文化が誕生したが、当時の国内旅行の参加率は東京市民に限定しても1〜10%程度であり、花見や散歩などの日常的な活動より、近代の旅行をはじめとする西洋から舶来された活動の参加率は明らかに低い<sup>(23)</sup>。つまり旅行というのは上流階級の間に流行っていた西洋的・近代的な生



活様式に対する模倣であると同時に、庶民に届かない非日常的な活動であると言える。

経済合理主義者であるヴェブレンは、このような模倣的な欲望によって生じる流行現象を、ライバル意識、階級間格差、競争、名声や社会地位を獲得する手段でありながら、異なる社会階層の間にある対抗心と競争を可視化し、上流階級の人々が自分を下層階級と区別するためにつくったシステムとして捉える。<sup>(24)</sup>このような指摘を踏まえて考えると、「私」の旅行は、ネクタイをつける必要のある階級を真似する行為であると同時に、文化的、経済的な力関係、つまり階級間の象徴的な移動とも言える。そして、より徹底的に近代的な生活様式を模倣し、それに接近するため、「私」の旅行には、ネクタイをつける姿や百貨店での買い物当然のようにもとめられるのである。

また今和次郎らの考現学調査によれば、当時銀座の通行人のうち男性の数が圧倒的に多く、しかも、男性の67%が洋装、すなわち洋装が優位であったのに対し、女性の洋装率は1%に過ぎなかった。<sup>(25)</sup>換言すると、当時の銀座は服装という外見の性・身体によって構築された一つジェンダー化の空間でもあり、近代化の象徴とも言える洋服姿の男性に高い親和性を示すと同時に、資本主義的近代化の過程である程度女性排除が進行した力学が見える。つまり「私」が模倣・競争する対象としたのは、近代化の成果と恩恵を最も享受した上流階級の男性に限定されていた。そのため、銀座へ旅行に出るたびに、他の男と戦う「武装」としてのネクタイをつけ、なるべく多くのお金を用意する必要があると「私」は感じていたのであろう。

要するに、「私」が銀座へ出かけることは、単なる現実的・物理的な移動ではなく、象徴的・時間的な移動であり、更に一時的ではあるものの階級間の移動でもある。そのため、「私」はこの東京市内の移動を「旅行」であると繰り返し強調した。そして、この旅行に対する強調には、「私」のネクタイへの愛着と同様に、男性を中心とした競合関係で優位に立ちたい、更に近代国家の支配階級の男集団に参入したいという欲望が通底すると考えられる。ネクタイ

をつけて銀座の百貨店へ旅行することで、「私」は支配階級の理想的な男性性に接近し、それを束の間に手に入れることが初めて可能となるのだ。

#### 四 「私」の欲望の生成

先述で確認したように、本作の「私」は失恋後ネクタイの買い漁りと旅行、すなわち当時の上流階級の身なりと生活様式を真似し始めるわけである。ところがこの一見失恋を中心に書かれた物語において、「私」は自分と「かの女」と「かの女の夫」との三角関係について次のように述べたことがある。

それに私はかの女の事はたつた二度しか夢には見なかつた。その代りかの女の夫のことを幾度か夢に見た。人は夢のなかで屢々自分で自覚しない自分を告白する謂はれてゐるが、して見ると私のかの女に対する愛はかの男に対する複雑な感情より弱いものであるのかも知れない。<sup>(26)</sup>

本作は失恋の物語として読まれてきたにもかかわらず、「私」の元恋人である「かの女」への言及が実は非常に少ない。更にここで「私」が自分の「かの女に対する愛」という欲望は、彼女の夫の存在を意識することによってますます強化されると告白しており、「私」の「かの女に対する愛」は、実に「かの男に対する複雑な感情」、すなわち彼女の夫が彼女を取り戻す欲望とその実行に対する反応から生じるものであると考えられる。

ジラールは人の「自分自身による欲望」に、「他者から借用している」「他者による欲望」を対立させ、その「他者

による欲望」はいつも自分の意識によって行動しているかのように主体を動かす、すなわち自分が何かを欲望するのは、他人がそれを欲望するからであると述べ、このような主体と他者との欲望の対象の三者関係によって生じた欲望を「三角形的欲望」と名付ける。本作における「私」の「かの女に対する愛」はまさにジラールが指摘した「三角形的欲望」であると考えられ、「かの女の夫」は「私」の欲望を引き出す「内的媒介」、すなわち模倣のモデルではありながら、ライバルまたオブスタクルでもある<sup>(27)</sup>。そのため「私」が三角関係で挫折した時、改めて支配しようとするのは「かの女」ではなく「かの女の夫」であり、女性を直接に支配することより、「かの女の夫」と比べると自分が優れているように見えることが一層「私」の男性性の回復につながる理由もそこにある。そしてこの「かの女の夫」を支配しようとする欲望は、最終的に社会経済的地位をめぐる男性中心の競争の中で優位を示すネクタイと旅行へ転換するわけである。ところが「私」のこのネクタイと旅行に対する欲望も、消費行動の文脈から見れば、当時の百貨店という媒体が作り出された模倣の欲望であると想定できる。

私はともかく三十何本かのネクタイを買った。銀座の通りでいいネクタイの集められてゐるのは尾張町の四つ辻から遠くないMKという店が一番だといふことを私は自然に知るやうになつた。また私が気に入つて手にとる品といふと、期せずして大ていの場合にJH Buckinghamと云ふロンドンの会社のものであつた。(中略)品質の点ではやはりロンドンのWelch Margetsonといふのが最も堅実で、また意匠とても少し大まかすぎはするが渋いものであつた。私はアメリカのものにはあまり同感したい。それはあまり悪く絢爛だからである。唯アメリカのものでは何と読むか知らないがQuixideと云ふマークのある品だけはその絢爛が通俗ではなくて或るグロテスクな、寧ろロマンテツクな味のものがある。それはアメリカに店のあるドイツ品でないかと思はれる。<sup>(28)</sup>

この「MKという店」は大正三年に落成した三越 (Mitsukoshi) 日本橋本店であると考えられる。ベンヤミンは、本来の文脈から事物を切り離し、新たな論理によってそれを配列する百貨店のような空間では、蒐集という「事物がその本来のすべての機能から切り離されて、それと同一のような事物と、考えうるかぎりもつとも緊密に関係するようになる」<sup>29)</sup>欲望が喚起されると述べた。本作の百貨店もイギリス、アメリカ、ドイツから輸送されたネクタイを陳列することで欧米中心のグローバルな空間を広げつつ、ネクタイが商品としてミクロに集結する場所として表象されている。そこに入った「私」が三十本以上のネクタイを買い漁る行為も切斷・蒐集を正当化する消費資本主義に創り出された欲望にほかならない。そして百貨店はこのようにあらゆるものを商品化する過程で、店内で売られている商品によって示された近代像も同時に売り、西洋からの輸入品を購入することによって近代化された西洋を模倣することを可能にし、人々の商品＝近代化への欲望も創出したわけである。

ここで述べたネクタイのみならず、「私」のもう一つの消費である旅行の普及に百貨店の影響も無視できない。例えば三越は大正七年に「旅行にかんする展覧会」を開催し、西洋的な習慣である近代旅行を紹介し、旅行する人々の姿と旅行に関する用具を展示した。百貨店が「単に商品売り場とする場所にとどまるのではなく（中略）日常生活における近代の定義する力を担うとともに」、「重要な文化的権威の地位を自らに与えた」<sup>30)</sup>とルイーズ・ヤングが指摘したように、百貨店は目に見える商品だけではなく、旅行のような体験やライフスタイルなど目に見えないものと西洋から舶来した生活様式に対する模倣的な欲望も創出していた。

飯田祐子は本作のような「三角形的欲望」を中心に展開する大正期のテキスト群の原型は夏目漱石の「こゝろ」（『朝日新聞』大正三年四月二〇日・八月一日）であると指摘しながら、その一例として春夫の「指紋」（『中央公論臨時増刊号「秘密と解放号」大正七年七月）をあげ、作中の主人公の模倣行為を次のように語る。

残った男が去った男を辿りながら、他の人間の入りえぬ幻想の世界をつくり上げている状態は、『こゝろ』と同じである。「実を言へばR・Nだつて狂人ではなかつたのだと、私は近頃思ふようになった」という二人の同一化をあらわす一文で閉じられるこの小説は、その意味で『こゝろ』の変異形である<sup>(31)</sup>。

飯田は「三角形的欲望」が大正期の書き手と読者の間で流通、消費されていたことを述べながら、春夫の「指紋」における一方の男がもう一方男の感情を辿り返し、同一化していく構造は模倣的欲望によって支えられ、漱石の一連の男―女―女の三角形構造の変形であると指摘した。この指摘を踏まえると、本作の「三角形的欲望」の構造は「指紋」から更に変形させたものであると考えられる。なぜなら本作において彼女の夫はどのような男であるという情報ほぼ不明であるため、「私」が特定の個体を模倣することができず、模倣対象を社会一般からすれば理想的男、すなわち西洋に対する模倣によって新しく構築された近代的な身なりや習慣を身につけたエリート男性へ拡大し、彼女に対する欲望をネクタイと旅行に対する欲望へ転換するからである。またこのような三角形の勝者が語る物語が「こゝろ」だったとすると、本作は「こゝろ」で語られなかった敗者側から、漱石の文脈を引用・反復しながら、それを攪乱して語り直す作品として読むことも可能である。

しかし「私」が近代化された百貨店で売っているネクタイは男の「武装」であるに對し、前近代の「呉服屋の店頭」の「二十五六ぐらゐな女物」は「私には決して用もないものである」<sup>(32)</sup>と述べたように、失恋した「私」の欲望の投影対象は始終男のみである。つまり物語の語り手が敗者側の男に移ったにも関わらず、男―男―女の三角形構造における女は依然として排除されており、不可解な他者のままで物語は幕を下ろした。

## 五 おわりに

本稿は「その日暮らしをする人」をテキストが生産された同時代の、明治の文明から大正の文化への移行と消費社会の台頭という歴史的文脈に着目し考察した。その結果として見えてきたのは、従来小田原事件がモチーフとなる失恋物語として読まれてきた本作は、実のところ女の存在が最初から排除されており、男の模倣的な欲望を中心とする物語としての小説の姿である。そしてこの模倣的な欲望は、「私」と「かの女の夫」・エリート男性の間のみならず、近代化＝西洋化が迫る当時日本社会全般に敷衍することも可能である。

その一方、旅行、百貨店など、「私」の作家という職業を可能にし、都市生活者の時間と空間の経験を激変させる鉄道技術と見知らぬ人々を密着させる待合室や車内という新しく創出された空間についてまだ考察の余地がある。なお、作品にはまた「英国風は極く落付いた穏やかな、相当年配の紳士向き、米国のは軽快な、きびきびしたビジネス的な所も若い青年が喜んで着る」<sup>33</sup>と同時代言説にあるように、英米の二つの対照的なスタイルが存在する。この二つのスタイルの背景として、近代日本にとって西洋の内実が明治の文明開化期のヨーロッパから徐々にアメリカへ移り変わることであると考えられるが、それを検証するために今後のより詳しい考察が必要である。

\*本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム(JPMJSP2138)の支援を受けたものです。

## 〔注〕

- (1) 中村武羅夫「文芸時評」『新小説』、大正一三年一月一日
- (2) 広津和郎「今年の小説界では誰々が活躍したか? (一)」『読売新聞』大正一〇年十二月二日
- (3) 岡栄一郎「新春文壇を評す」『時事新報』、大正一一年一月一八日
- (4) 赤松月船「書斎の佐藤春夫氏、及その作品」『新潮』大正一二年四月一日
- (5) 山本健吉「解説」『佐藤春夫全集 第二卷』、講談社、昭和四一年五月、六〇五頁
- (6) 河野龍也「生誕一三〇年記念 知られざる佐藤春夫の軌跡 —— 密蔵資料を読む ——」『武蔵野書院』、二〇二二年一〇月
- (7) 河野龍也「佐藤春夫と大正日本の感性」物語」を超えて』鼎書房、二〇一九年三月、二二六頁
- (8) 『太政官布告 明治五年』、国立国会図書館デジタルコレクション、七〇から七一頁、最後閲覧日…二〇二四年八月二三日
- (9) 小山直子『フロックコートと羽織袴 礼装規範の形成と近代日本』勁草書房、二〇一六年三月、「第二章 フロックコートとシルクハットの紳士像」を参照する
- (10) 8と同じ、一六一頁
- (11) 佐藤春夫「その日暮らしをする人」、『定本佐藤春夫全集 第4巻』臨川書店、一九九八年五月、八〇頁
- (12) 7と同じ、二二七頁
- (13) 藤野裕子『都市と暴動の民衆史 東京・一九〇五―一九二三年』株式会社シナノ、二〇一五年一〇月、一六六頁
- (14) 11と同じ、八〇位頁
- (15) 14と同じ、八一頁
- (16) ジョアン・フィンケルシュタイン著、成実弘至訳『ファッションの文化社会学』せりか書房、二〇〇七年九月、五八頁
- (17) 15と同じ、八一頁
- (18) 17と同じ、八八頁
- (19) 加藤千香子「男性性の主体的構築——「青年」と男性性」『ジェンダーと社会』旬報社、二〇一〇年六月、三五頁

- (20) 18に同じ、八一から八二頁
- (21) 吉見俊哉『都市のトラマトウルギー 東京・盛り場の社会史』河出文庫、二〇一八年二月、二四一から二四六頁
- (22) 21と同じ、二六四から二六五頁
- (23) 青木宏一郎『大正ロマン ―東京人の楽しみ―』中央公論新社、二〇〇五年五月、三〇〇頁
- (24) ソースタイン・ヴェブレン著、高哲男訳『有閑階級の理論 増補新訂版』講談社学術文庫、二〇一五年七月、「序説」と「金銭的な生活様式の基準」を参照する
- (25) 今和次郎・吉田兼吉編著『モデルノロヂオ考現学』学陽書房、一九八六年一月、「一九二五年 初夏 東京銀座街風俗記録」20に同じ、八五頁
- (26) ルネ・ジラール著、古田幸男訳『欲望の現象学 ロマンテイクの虚偽ロマネクスの真実』法政大学出版局、二〇〇一年五月、「第一章『三角形的』欲望」を参照する
- (27) 26と同じ、八七頁
- (28) ヴァルター・ベンヤミン著、今村仁司ほか訳『パサージュ論 第二巻』岩波現代文庫、二〇〇三年八月、九から一六頁
- (29) ルイーズ・ヤング「近代」を売り出す――戦間期の百貨店、消費文化そして新中間層」、『日常生活の誕生 ―戦間期日本の文化変容』、バーバラ・佐藤編、柏書房、二〇〇七年五月、二〇四頁
- (30) 『彼らの物語 日本近代文学とジェンダー』飯田祐子、名古屋大学出版会、二〇〇四年八月、二〇六から二〇七頁
- (31) 28と同じ、八二頁
- (32) 『読売新聞』大正一三年三月一五日
- (33)



## SUMMARY

## About Sato Haruo's "That Person Scrapes a Living Day by Day"

- With the help of 'necktie' and 'travel' -

LING DENG

"That Person Scrapes a Living Day by Day" (1921), a novella by Sato Haruo published in *Chuokoron* magazine, has been interpreted as an I-novel based on the love triangle between Sato Haruo, Tanizaki Junichiro and his wife Chiyo. However, it must be noted that the interpretation of this work has been largely confined to the predetermined thematic framework of an I-novel, and concrete research on it has not advanced much. Therefore, this paper moves away from a fixed interpretation and considers this work as an independent text. Based on this, this paper focuses on the context of the transition from Meiji civilization to Taisho culture and the rise of consumer society. It examines the 'necktie' and 'travel' that appear in the work, as well as the consumer culture of department stores in the 1920s, and it reveals the significant issue of the generation of protagonist's desires. The aim is to clarify the position of "That Person Scrapes a Living Day by Day" that has been overlooked in Sato Haruo research, understand its critical perspectives, and explore the potential for re-evaluation.

\* This work was supported by JST SPRING, Grant Number JPMJSP2138.